

記号、凡庸、問題

蓮實重彦とジル・ドゥルーズの若干の比較

要旨

氏名：井口海斗

近年、蓮實重彦について本格的に論じられ始めているが、彼をおおむね理論的な体系性から思い切り離れた細部の人として論じたり、そうみなされていることを前提に新解釈を打ち出したりするものが多い。だが、蓮實の批評的戦略は実は極めて体系的なものであり、批評的実践での作品の細部への注目はその戦略の体系性と矛盾しない。

本論ではこのことを検討するために、1970年代から80年代を中心に展開された「説話論的な磁場」と「凡庸」の2概念に焦点を当てている。ところで、この時期は蓮實がミシェル・フーコーやジル・ドゥルーズ、ジャック・デリダといったフランス現代思想の哲学者たちを日本に紹介した時期にあたる。蓮實は彼らから明らかに影響を受けていて、「凡庸」という概念を「愚鈍」という概念との関係で考えるという視点はドゥルーズの『差異と反復』を読むなかで得たものだという。そのため、本論は蓮實とドゥルーズの議論の比較論という側面も持つ。

だが、表象として固定化される以前の差異じたいを思考しようとするドゥルーズに対し、その思考もまた表象によってしか伝達しえないという観点で考えていることが蓮實の議論をややこしくしている。このことは表象や表象行為を巡る蓮實の考えに由来するため、本論では上記の議論を補完するものとして彼の記号観も検討している。